からしだね

発行・カトリック水巻教会
編集・広報委員会
遠賀郡水巻町頃末南１丁目 35-3
〒807-0025
TEL 093(201)0680 FAX(201)7354
第 326 号

ホームページアドレス　http://www1.com.ne.jp/~mizumaki

聖　徒　の　交　わ　り

マヘル神父

カトリック教会は１１月中死者のために祈りを行います。とくに１１月２日。

日本では仏教の影響で８月お盆の時に特別な行事が行われます。

毎日の御ミサの中で死者のためにお祈りします。

日本に住んでいるのでお盆の時に祈ることは良いと思われます。信仰宣言の中で聖徒の交わりを信じますと書いてある通り、キリスト教において死者の記念と尊敬は死者のために祈ることが中心になっています。

祈りは自分の身内、親類、その他関係の合った人たちのために捧げるのは当然ですが、この世で私達と縁のなかった全ての死者のために祈ることも大切です。

愛は死後にも及ぶこと、互いの愛の絆は死を超えて継続すること、このようなことに対する信仰は、世々を通じてキリスト信者の根本的な確信となってきましたし、今も慰めを与えてくれます。

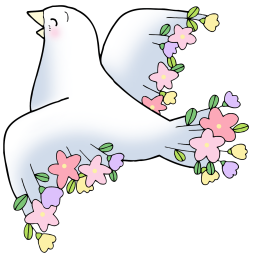
この世を去った愛する人に慈しみと感謝を示し、またゆるしをも願い求める必要を感じない人がいるでしょうか。

私が他の人のために行う執り成しの祈りは、その人と無関係なもの、無縁なものではありません。その人が死んだあとにおいてもです。存在のつながりの中で、私が他の人に捧げる感謝も、他の人のために捧げる祈りも、その人の清めにとって何らかの意味を持つことが可能です。

キリスト信者である私達は「私はどうすれば救われるだろうか」と問うだけではいけません。私達はこうも問わなければなりません。「他の人が救われるために、他の人にも希望の星が上がるために私はどうすればよいでしょうか」。そうすれば私は自分の個人としての救いのためにもできるだけのことをすることになるのです。

８月１５日被昇天のミサで共同体として祈って欲しい。亡くなられた祈願者の名前を後ろの用紙に書いて箱に入れてその日奉納の時に祭壇の上に置きます。

１５日のミサの後で追悼のミサを行います。



広報委員会からのお知らせ・・・・２面
ペルーからのメセージ・・・・・２面
侍者に始まった信仰生活・３・４・５面
パウロの歩いた道・・・・・・・・６面
教会学校のページ・・・・・・・・７面
お知らせ・・・・・・・・・・・・８面

広報委員会からのお知らせとお願い

＊今年度の総会の報告を先月号に掲載しましたが、一部の人たちから報告の内容について間違っているので訂正するように申し入れがありました。

「からしだね」の広報担当者は、創刊時より小教区の様々な行事などについて報道してきました。特に総会や教会委員会については委員が出席して正確な審議の内容を皆様に報告してきました。しかし、今年度からは、主任司祭の意向もあり、委員会事務局から議事録を提出していただき、そのまま掲載することになりました。したがって、すでに掲載したこの記事は執筆者からの訂正や弁明が無い限り掲載した内容を編集委員会が訂正することはできません。内容についてのご指摘がございましたら、次回の委員会などに提起していただくようにお願いします。

＊水巻教会の広報誌である「からしだね」は創刊してはや 27 年を過ぎ 326 号になりました。紙面の形態も B4二ページから四ページになり、B5縦書きから横書きにと、長い年月に変化してきました。その間、色々な企画や投稿もあり、紙面の内容もその時代に合わせて変化してきました。この間、解決できていない問題は写真の掲載が難しいことです。他の教会のように印刷業者に印刷を依頼できればよいのですが、大きな費用がかかります。現在の広報委員は、今までの状態での発行を続けて行くことにしたいと思っていますが、写真が多い他の教会の広報誌のようなものにすることを皆さんが望まれるようでしたら、教会委員会へ予算の要請をしなければなりません。もちろん編集内容も大幅に変えることになります。

先日、写真が多い他の小教区のような内容にすべきで、できないようだったら他の教会に教えを受けに行くようにと指摘も受けました。この指摘は今の編集委員の能力不足とも取れました。私たち自身の能力不足については認めますが、常に今のままで良いのかと反省しているつもりです。

これからの編集方針について、みなさんのお考えを聞かせください。また、新しく皆さんの投稿なども掲載することも検討したいと思いますので、この点についても意見をお寄せください。これまで発行を続けてこられたことは、歴代の多くの編集委員の努力と、皆さんの支援とご協力の結果と思います。心より感謝しています。　　（広報委員長　岩本）

―イエスのカリタス修道女会からのメッセージ―

水巻カトリック教会レプトン会の私達の宣教活動に対して温かいお祈り、ご理解とご支援に支えられて、スラム街の子供たちとその家庭に神様の愛の証を続けることが出来ています。お礼と現状報告を兼ねて皆様方を訪問させて頂きます。

リマの聖女ローザ準管区　管区長　シスターテレジア川端キヌ卫

ペルーの貧しい子どもを支えるレプトン会

６月 15 日に行われた大人の日曜学校の講和を紹介します。

侍者に始まった信仰生活　　吉岡英美

人生の問題の中で、他の人と私の関わってきたこと、信仰の証し、私達のテーマを述べたいと思います。洗礼から、紆余曲折５５年が経過しました。洗礼は、S３３年、小学校６年生になる直前、黒崎教会で、パリ・ミッション会のフィリーベル神父より受けました。これに前後して家族５人が受洗したのです。以降、信仰の時代を幾つかに分けてお話しします。

※最初の８年間　　「ろうそく持ちから侍者へ」の時代

この頃は、神父がラテン語を唱え、侍者はラテン語で答えた時代でした。ろうそく持ちを１～２年。それから侍者となりました。ろうそく持ちは赤白の服だが、侍者は白の服となり、誇らしげに思いました。神父と共にミサに仕える者として使命を感じました。私の信仰の原点は、”ミサ答（ミサごたえ）”にありました。

侍者は高校を終えるまでやっていました。私の同級生が多くいました。その中の一人は歳が下の人で、今神父になっている、大田神父です。その頃、土曜は制服で学校帰りに教会に行き侍者をしました。皆がいっぱい集まり楽しく卓球にも興じました。

なぜ、続いたか？それは親の背中を見たからでしょう。特に男親の背中を。親がミサに預かっていれば、子どもに対し、いずれ分かる日が来るということでしょう。

その大事な時期に、父は４３歳で亡くなりました。私は高校３年生でした。今思い出せば、信仰の道に厳しい父でした。

話は戻りますが、父親の受洗のきっかけになったのは、病気治療のために九大病院に入院。同じ会社の人の進めで洗礼へと導かれたのです。父親が洗礼の決意をしてから、私も公教要理の勉強をさせられました。（そして、私は間もなく前述の侍者に。）

その当時から、父は日曜ミサの先読みをするために、ミサが始まる前から祈りしていた信仰熱心でした。ミサ関係の書物を読んで信仰を深めたのでしょう。父が洗礼を受けたきっかけであろう意味は、それは治る見込みがないもので、何らかの救いを求めたということでしょう。信仰宣言において、死者の復活、永遠の命を信じます、という文言があるように。

※第２の時代：　S42～S59　20～30 歳代

この時代は、信仰から遠ざかり名ばかりのキリスト教徒となった時代でもあります。関西学院大学に入りました。行く前に徳山神父が大学の寮（メソジスト系）の紹介状を書いてくれたのでしたが、私がカトリック、向こうは新教で、寮の方も配慮して、「通学が大変でしょう」と言われたのは、やんわり避けたのかもしれません。

しかし、大学自体はキリスト教系、プロテスタントでも同じキリスト教です。その上、大学の授業には、聖書講読の授業もあり、初めて聖書の勉強をしたと言えます。一方、教会に行かなくなったのですが、罪悪感は浮かびませんでした。

その後、就職して、地元に戻りましたが、仕事では大川市に転勤(教会は佐賀、久留米と‥)、教会が遠く交通不便と仕事の忙しさで行くチャンスがなくなり、教会には行かなかったのです。やがて帰郷、八幡天神町教会へ通い、徳山神父のもとで結婚式を挙げました。司祭から結婚講座を免除されました。中高生時代に熱心に勉強したからとのことでしょう。

それから４年後、聖母幼稚園に子供が世話に。子供の信仰教育は気になっていました。かなり長く教会から離れていたが、子供の将来を思うと聖霊に導かれて教会に行くようになりました。

※S62～H11 年　20 年間　仕事中心の時代

この間、一応、教会に足を運ぶことになりました。その間、ラバルタ、ベリオン、ガイヤールと神父が変わってゆきました。この間、私も信仰の継承を考えました。おかげで子供も、信仰の道を歩みました。上の子供は、洗礼をベリオン神父から、下の子供は、洗礼を、ガイヤール神父から授かりました。私自身は、共助組合、建築委員、地区委員に関わりました。

※最後　この７年、H18 年～

この７年ほど、司祭と信者の関係において、司祭中心の教会に後戻りしていると見受けます。来年で開設されて 60 年の水巻教会。パリ・ミッション会が司牧してくれたことを、未来に残すことが必要です。この約８年、教会の責任者は司祭であって、信徒はそれに従順という上下関係が生じているかのようです。これでは公会議の前に戻ることです。司祭は交代し方針も変わっていくが、信徒は変われない。自分が住んでいる教会に居る信徒は小さな教会から出てゆくわけにいかないのです。

2012 年の１月のからしだね、ハーン神父の原稿「水巻教会の思い出」は、次の様です。「水巻教会で最初の印象は、信者の皆さんがとてもしっかりして、自分の教会に愛着を持ち、一生懸命働くこと。そのため司祭は、教会の運営をそれぞれの係に任せ、自分は司祭職に専念できやすい教会でした。パリ・ミッション会の神父がみごとに信徒を育て、信徒は司祭に対する信頼が強い教会でありながら、神父が間違ったときには遠慮なく、しっかりと言ってくれました。」また、昨年３月に、新たしい風をカトリック教会に吹き込んだ、フランシスコ教皇も、バチカン公会議に基づき、従来の聖職者中心を改め、教会は聖職者ではなく、信徒のためにある。信徒に尽くすことが、聖職者の本分である、と言っています。

そのために、共同体の教会において、司祭の責任と役割、信徒としての責任と役割を分担しながら、同じキリストの信仰の前に協力し合い、自分の課せられた使命を果たす必要があるでしょう。参考になる文が見つかりました。掲載してもらいますので、お読み下さい。

札幌司教区　２０１４年度年頭書簡　－司祭中心の教会から信徒中心の教会へ－

（冒頭省略）第２バチカン公会議以後５０年、今回の表題「司祭中心の教会から信徒中心の教会へ」の表現はお題目のごとく、今まで何度も繰り返されてきました。やがて、司祭が

減少しはじめ、更に大きな声で叫ばれるようになりました。それでいながら、いよいよ司祭が不足し、一人の司祭が３~4の小教区を兼務する事態になってきてもなお、現実はまだまだ司祭中心の教会であり、信徒はその指示によって動くアシスタントの役割の域を出ていないところが多いように見受けられます。（一部省略）

これまで、教会をどう運営していくかという共通のビジョンが教区になかったので、小教区の運営はそれぞれの地区に任され、多くの場合、教会運営はそのときの主任神父のやり方に依存していました。そして、**司祭によってそのやり方が異なるので主任司祭が替わるたびに教会の運営方針が変わり、教会の雰囲気さえも変わってしまう**ことが多かったのです。

教会をその時々の司祭の色に染める。それは司祭が一番してはならないことと私は考えています。それぞれの教会の共同体の個性を生かし、その共同体独自の色を醸し出し、伝えていくことこそが大切なことです。司祭が変わるたびに教会の雰囲気が変わるようなことは、本来避けるべきことなのです。（一部省略）

司祭はオールマイティーではありません、教会運営で生じる全ての事柄に通じているわけでもなく、全てに適切な判断を下せるわけでもありません。むしろそれぞれの分野で、司祭よりも専門的な知識や経験に富んだ信徒が必ずいるのです。私の考えは、信仰における重要な事柄に関わる事以外は、教会運営その他の事柄に関して、信徒が自分たちで責任を持って考え決めていくべきであるということです。（一部省略）

すべてを自分で決めてしまうことは司祭にとっても楽なことであり誘惑です。（二文省略）しかし、このことこそ、前任の地主司教様が以前の年頭司牧書簡で脱皮するようにと述べられていた「小教区中心主義」の発想の元なのです。

最終責任は全ての点について主任司祭にあります。しかし、それは全てを司祭が判断し決めるということを意味するのではありません。**司祭が変わっても、変わることのないビジョンを持ち続ける為に、教会の信徒が、共同体として責任を持って向かうべき方向性を自分たちで選択し実行していくことが大切なのです。**そのためのヒントや提言を与えること、それが司祭の役割と私は考えています。

信徒の役割は洗礼によって与えられたイエスの王職・預言職・祭司職にあずかる者として与えられた固有の使命を果たすことです。教会の管理運営、要理担当や信徒の生涯養成、典礼における奉仕等、司祭からの委託ではなく、キリストから委託されたものとして、固有の召命に生きる信徒が求められています。（一文省略）信徒は司祭の指示に従うアシスタントではなく、司祭修道者と共に協働者としてチームを組み、責任を持って宣教司牧に取り組んでいく事がこれからは求められます。（一文省略）今回は上述の基本的な考え方を皆さんに理解して頂く事に留めたいと思います。

2014年1月1日　札幌司教　ベルナルド勝谷太治

パウロの歩いた道　№６

ピシディアのアンティオキアを追い出されたパウロたちは、イコニウムにやってきます。使徒言行録には距離とか日数は書かれていませんが、アンティオキアからイコニウムまで徒歩で４～５日かかったでしょう。イコニウムという町は、今はコンヤという名前の町になっています。コンヤは 11 世紀からイスラム教が盛んになりましたが、特徴的なのはイスラム教神秘主義のメブラーナ教団の発祥の地となりました。この教団は、白い装束で男性が回転しながら瞑想しながら踊ります。この踊りは NHK のシルクロードの取材番組で紹介されたことがあり有名です。創立者の墓石が大きなモスクの中にあり、観光客が沢山来ています。

この町でもパウロたちはアンティオキアから追いかけてきた人たちによって追い出されました。そのため街道を東に 38Km 行ったリストラの街にいきました。ここまで徒歩で一日かかります。ここでの宣教は最初はうまくいったのですが、またもやアンティオキアやイコニオンから追いかけてきた反対者から追い出されます。この時パウロはエルサレムで迫害を受けて殉教したステファノのように石を投げられ殺されかけます。このことは後日に手紙の中でも「一度石で殺されかけた」と述べています。(ニテサロニケ１章５節)

その後、二人は街道を東に行ったところにあるデルベに逃げます。ここまでは直線距離で85Km ありますので徒歩で４日くらいかかったでしょう。とにかく主の御言葉を伝えるために二人は歩いたのです。

コンヤから東に行くとリストラやデルベに行くことができますが、この道は九州が入ってしまうほど広大なアナトリア高原の中に伸びているシルクロードに続く道です。デルベから一週間くらい道を歩くと道は南北に分かれます。北に行くと、奇観な風景で有名なカッパドキアに行くことができ、南に行くとキリキアの関門から峠を降り海岸沿いのパウロの故郷タルソス出ることができます。第一回の伝道旅行では近道であるこちらへ行かず、二人はアタリアへ戻る道を通って帰りました。リストラとデルベの町はまだ発掘されていないので、遺跡の丘(テル)の状態のままになっています。

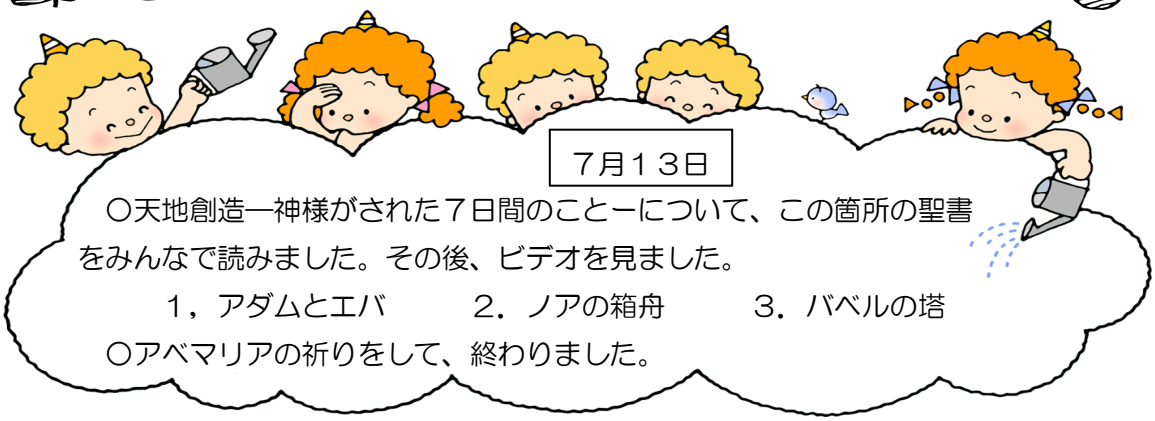
以前、広報委員会の慰安旅行で四国の宇和島方面に行きました。一泊後、宇和島教会のミサの後に、宇和島近くにある四国八十八か所の霊場のお寺を数か所回りました。

このときに驚いたのは、巡礼者の半分が若者だったことでした。その上、巡礼者が参詣するお寺の雰囲気と巡礼者の真剣さに神秘的な雰囲気を感じて感激したのを覚えています。

パウロたちが福音宣教のために長い距離を歩いたことについて、**聖書学者の和田幹雄神父(大阪教区)様**は著書の中にこう書かれています。

「福音宣教の旅は、予期しないものに満ちていたに違いない。これをとおして彼らが福音を宣教したのは、まずは自分たち自身に対してではなかったか。その旅の苦しみをとおしてキリストの受難と死の秘儀にいっそう深くあずかるようになったことであろう。」

教 会 学 校 の ペ ー ジ



７月１３日

〇天地創造―神様がされた７日間のことーについて、この箇所の聖書をみんなで読みました。その後、ビデオを見ました。

１，アダムとエバ　　２．ノアの箱舟　　３．バベルの塔

〇アベマリアの祈りをして、終わりました。

７月２０日　　教会学校「子どものつどい」

１．パネルシアター

最初に、吉田地区の平尾さんによる「しゃぼん玉とばそ」の平和についてのパネルシアターを見ました。「しゃぼん玉」の歌の１番では「かぜかぜ吹くな」の歌詞を「戦争吹くな」に、２番では「しゃぼん玉消えた」を「赤ちゃん消えた」にして、戦争の悲しみを訴えました。

２．そうめん流し

次に、大人の方が用意してくれたそうめんを、竹で作ったそうめん流しの道具に流して、みんなでそうめん流しを楽しみました。

【みんなで描いた絵】

３．聖書の絵

今日の聖書の福音の場面を絵に表わしました。よい麦と悪い麦を使った天の国のたとえを、何度も何度も読んで絵にしました。イエス様の足元に、良い麦と悪い麦を描きました。

４．献金箱作り

各教会に配られた平和の祈りのカードを入れる献金箱(木製)をみんなで作りました。短冊に平和の祈りを書いて、献金箱の中に入れました。

8月のおしらせ

★特別献金★

６月２９日

聖ペトロ・聖パウロ使徒座への献金

４３，４４０円

ご協力、ありがとうございました。

★第１４回　北九州平和の集い★

日　時：８月１０日(日)

場　所：第１部　各小教区にて

第２部　小倉カトリック教会

(13:00～16:00)

※14:40～　中村神父の講話

※15:25～　平和祈願

詳しくは、教会で配られているチラシをご覧ください。

★特別寄付★

高須・青葉地区の尾上さんより、ご寄付をいただききました。
ありがとうございました。

★聖母被昇天のミサ★

日時：８月１５日(金)

午前９時３０分から

★感謝状をいただきました★

長年、水巻教会が関わっている、ホームレス支援活動(お弁当作り)に対して、活動支援団体のＮＰＯ法人「抱僕」より、感謝状をいただきました。

感謝状は、信徒会館の図書室に飾っていますので、ご覧ください。

これからも、ホームレス支援活動に、ご協力をお願いします。

人-ひと

【帰天】安らかに！

７月１３日

◇尾上　仁三郎さん（高須・青葉地区）

お盆の納骨堂について

★納骨堂開館日時

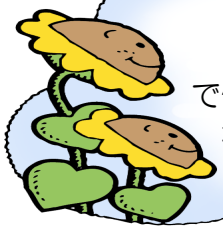
８月１３日(水)・８月１４日(木)・・・午前９時～午後５時

８月１５日(金)・・・・・聖母の被昇天のミサ後～午後５時

★上記の時間に都合が悪い方は、いつでも神父さまにお電話ください。

教会電話番号　093-201-0680

★奉安室のカギを忘れずにお持ちください。　　納骨堂委員会　宗



ペルーの現状報告会をおこないます

８月２４日(日)ミサの後、イエスのカリタス修道女会ペルー共同体で働いておられるシスターマリア・ステッラ小林さんが水巻教会に来られ、現地の報告をされることになりました。

３年ぶりの現地報告会です。皆さまの参加をお待ちしています。